

今般勳章別冊ノ通被定候條此旨布告候事(九年第四百一號布告ヲ以テ)
(賞牌ヲ勳章ト改ム以下倣之)

(別冊)

朕惟フニ凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者宜ク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ユヘシ
依テ勳等勳章ノ典ヲ定メ人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス
汝有司其斯旨ヲ體セヨ(勅諭ハ朱書トス)

明治八年二月

勳等勳章

勳等ハ勳績及功勞アル者ヲ賞スル爲メニ設クル所ノ階級ニシテ位階ト異
ナル故ニ各種ノ勳章ヲ佩用セシム
勳等ヲ分ツテ八級ト爲ス

勳一等

右ニ敍スル者ハ一等勳章ヲ賜フ

勳二等

右ニ敍スル者ハ二等勳章ヲ賜フ

勳三等

右ニ敍スル者ハ三等勳章ヲ賜フ

勳四等

右ニ敍スル者ハ四等勳章ヲ賜フ

勳五等

右ニ敍スル者ハ五等勳章ヲ賜フ

勳六等

右ニ敍スル者ハ六等勳章ヲ賜フ

勳七等

右ニ敍スル者ハ七等勳章ヲ賜フ

勳八等

右ニ敍スル者ハ八等勳章ヲ賜フ

○ 從軍記章(九年第四百一十一號布告ヲ以テ從軍牌ヲ從軍記章ト改ム以下倣之)

從軍記章ハ將卒ノ別ナク軍功ノ有無ヲ論セス凱旋ノ後從軍セシ徵ニ之ヲ賜フ

○ 一勳章及從軍記章ハ佩用本人ニ止リ子孫之ヲ用ユルヲ得ス

勳章 佩用式
從軍記章

- 一勳章ハ勳一等ニ限り必ス勳二等ノ牌ト共ニ兩箇ノ牌ヲ佩フヘシ其他二等以下ハ一箇ヲ佩ルヲ規則トス譬ハ三等ノ牌ヲ佩ル者勳二等ニ敍スルトキハ嘗テ佩フル所ノ三等牌ヲ止メ二等牌ノミ佩ルカ如シ
- 一勳章ハ禮服ノトキ佩ヘシ平服ニハ佩フヘカラス平服ニハ略綬ヲ左襟見返ノ釦穴ニ掛ケ其表トス

- 一 一等勳章ハ幅廣キ綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ斜ニ佩フ
- 一 二等勳章ハ右肋ノ邊ヘ綬ヲ不用針ニテ挾ミ佩フ
- 一 三等勳章ハ綬ヲ領ニ纏ヒ喉下ニ佩フ
- 一 四等以下ノ勳章及從軍記章ハ左肋ノ邊ヘ左ニ別シ佩フ
(表并ニ圖式略之)

○ 勳章潤飾増設詔勅 明治二十一年一月三日

朕曩ニ勳位ヲ定メ佩章ノ制ヲ設ク茲ニ復潤飾増設シ新舊與ニ併行シ勳功アル者ヲ賞旌シ以テ獎勵ノ道ヲ擴ム汝衆庶此旨ヲ體セヨ

○金鷄勳章創設ノ詔勅 明治二十三年二月十一日
朕惟ミルニ

神武天皇皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ヘリ今ヤ篋カニ登極紀元ヲ算スレハ
二千五百五十年ニ達セリ朕此期ニ際シ
天皇裁定ノ故事ニ徴シ金鷄勳章ヲ創設シ將來武功拔群ノ者ニ授與シ永ク
天皇ノ威烈ヲ光ニシ以テ其忠勇ヲ獎勵セントス汝衆庶此旨ヲ體セヨ

○金鷄勳章等級製式佩用式 明治二十三年二月
勅令第十一號
朕金鷄勳章ノ等級製式佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
一金鷄勳章

功一級ヨリ功七級ニ至ル武功拔群ナル者ニ賜フ

(金鷄勳章製式略之)

金鷄勳章佩用式

- 一 功一級章ハ大綬ヲ以テ左肩ヨリ右脇ニ垂レ其副章ヲ右肋ニ佩フ
- 二 功二級章ハ左肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 三 功三級章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 四 功四級章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

○勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式 明治二十一年一月
勅令第一號

朕各種ノ勳章等級製式及ヒ大勳位菊花章頸飾ノ製式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布
セシム

勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式

一 寶冠章

勳一等ヨリ勳五等ニ至ル婦人ノ勳勞アル者ニ賜フ
章 寶冠ト竹櫻ノ形ヲ以テ飾ル

綬 地黃色雙線紅色

一 勳一等旭日桐花大綬章

旭日大綬章ノ上級トス勳勞アル者ニ賜フ

章 旭日ト桐花ノ形ヲ以テ飾ル

綬 地紅色雙線白色

一 瑞寶章

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル勳勞アル者ニ賜フ

章 鏡珠ノ形ヲ以テ飾ル

綬 地淡藍色雙線橙黃色

一 大勳位菊花章頸飾

頸飾ハ大勳位ニ敍セシ者ニ特別之ヲ賜フ

菊花菊葉ノ形ト明治二字古篆文ヲ以テ飾ル

○勳章及大勳位菊花章頸飾圖樣明治二十一年十一月
明治二十一年一月勅令第一號各種ノ勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣左ノ如シ

(各種勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣略之)

○勳章佩用式明治二十一年十一月
勅令第七十六號

朕勳章佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳章佩用式

第一條 大勳位菊花章

菊花章ハ頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ其副章ヲ左肋ニ佩フ大綬ヲ以テ佩フル時ハ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ハ左肋ニ佩フ

但菊花章ヲ賜ヒタル者ハ旭日桐花大綬章瑞寶一等章ヲ併セ佩ルコ

勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式

トテ得(二十二年勅令第百八)
(號ヲ以テ但書追加)

第二條 寶冠章

一 勳一等寶冠章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ

二 勳二等寶冠章以下ハ結蝶狀ノ綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第三條 旭日章

一 勳一等旭日桐花章並旭日章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ

二 勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ

三 勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ

四 勳四等勳五等勳六等勳七等勳八等桐葉章ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第四條 瑞寶章

一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ

二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ

三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ

四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大勳章ハ之ヲ併佩セス

○勳章記章佩用心得二十二年二月

第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花

ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ

第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時

ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ

受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ

第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケ

タルモノヲ前ニ受ケタルモノハ位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ

勳章等級製式大勳位菊花草頸飾製式

第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ

第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服燕尾服着用ノ時佩フヘシ從軍記章及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ

通常禮服着用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ニ佩ヒ其位置ニ佩フ又大綬章ヲ胸衣ノ下襦衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ニ佩ヒ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

旭日二等章ヲ有スル者通常禮服着用ノ節ハ其副章ヲ省クコトアルヘシ

第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服着用ノ時佩フヘシ

一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服着用ノ時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒスシテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス

第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大綬章及ヒ其副章ヲ佩フル時ハ我大綬章ヲ省キ我副章ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及褒章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

○略章略綬佩用心得二十二年二月勳局告示第二號

勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式

- 一 各種勳章ノ略章(凡ソ徑曲尺五六分若クハ其以下ノ勳章ヲ指シテ)ハ通常禮服着用ノ時或ル場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スルヲ得外國勳章ノ略章モ亦同シ
- 二 略綬ハ通常禮服通常服用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ略綬ハ別種二個以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル絹ヲ以テ二箇若クハ數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外數箇合併ノ略綬ヲ製シ之ヲ佩用スルコトヲ得
- 三 我略章ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ
- 四 勳二等旭日章副章製式(勳局告示第一號)明治二十一年十一月一號勳局告示第一號
勳一等旭日章副章製式(勳局告示第一號)明治二十一年十一月一號勳局告示第一號
勳三等旭日章副章ハ其製式勳三等旭日章ニ異ナルコトナシ

○勳章還納ノ場合明治二十二年三月勅令第三十八號

朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
勳等進級シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局へ還

納スヘシ

但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

○勳章還納手續勳令第二十二年三月九號

勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

勳章還納手續

- 第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局へ還納スヘシ
- 第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局へ差出スヘシ
官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳へ差出シ官廳ハ之ヲ賞勳局へ送付スヘシ
- 第三條 外國人ノ勳等進級シ同種上級勳章ヲ受ケタル者モ亦此手續ニ從ヒ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館へ差出スヘシ
- 第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省へ送付シ同省ハ之ヲ賞勳局へ送付スヘシ
- 第五條 勳章還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局

勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式

へ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ

附則

一從前同種勳章ニ進級シタル者ハ東京ハ二週間以内各地方ハ三十日以内ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ手續第五條ニ依ルヘシ
但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス

○

○外國勳章佩用願規則 明治十八年十一月
第三十五號布告

明治十一年^六月第拾五號布告外國勳章佩用免許願手續左ノ通改正ス

外國勳章佩用願規則

第一條 外國ノ勳章ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ賞勳局總裁へ願出免許狀ヲ受クヘシ

第二條 佩用願書ニハ勳章勳記其他關係書類ヲ添へ勅奏任官ハ直ニ賞勳局

總裁へ華族ハ「宮内卿」判任官以下ハ本屬長官士族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局總裁へ差出スヘシ

第三條 外國ノ勳章ヲ佩用スル者死亡シタルトキハ三十日以内ニ其旨ヲ遺族又ハ親戚ヨリ華族ハ「宮内卿」士族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局へ届出ヘシ

第四條 外國ノ記章從軍記章人命救助記章博覽會記章ノ類ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ總テ此規則ニ準據スヘシ

○皇族外國勳章佩用願手續內規 明治十八年一月
賞勳局並外務宮内兩省へ達

皇族外國勳章佩用願手續內規左ノ通相定候條此旨相達候事

皇族外國勳章佩用願手續內規

一皇族ヨリ外國勳章ノ佩用ヲ願ハントスルトキハ勳章勳記其他關係書類ヲ添へ「宮内卿」ヨリ賞勳局總裁へ照會スヘシ

外國勳章佩用願規則

二賞勳局總裁ハ勳章勳記ヲ審査シ上奏裁可ヲ得タルトキハ免許狀ヲ「宮内卿」ニ傳達スルモノトス

三皇族ニ外國ヨリ勳章寄贈ノ通知ヲ得タルトキハ「外務卿」ハ其旨ヲ賞勳局總裁ヘ通知スルモノトス

四外國ノ記章佩用願手續モ此内規ニ準據スヘキモノトス

○敍位條例明治二十年五月勅令第十號

朕敍位條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

敍位條例

第一條 凡ソ位ハ華族勅奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰スヘキ効績アル者ヲ敍ス

第二條 凡ソ位ハ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス

第三條 凡ソ位ハ從四位以上ハ勅授トシ宮内大臣之ヲ奉ス正五位以下ハ奏授トシ宮内大臣之ヲ宣ス

第四條 凡ソ位ハ懲戒ニ因リ返上セシムルカ又ハ刑法ニ因リ公權ヲ剝奪セラル、ノ外終身之ヲ有スルヲ得

第五條 凡ソ位ハ從四位以上ハ爵ニ准シ禮遇ヲ享ク其准例左ノ如シ

公	爵	侯	爵	伯	爵	子	爵	男	爵
從一位	正二位	從二位	正三位	從四位					

第六條 爵位ヲ併有スル者ハ高キニ從テ禮遇ヲ享ク

○位階奉宣方二十年五月九日勅令第十號

以テ位階奉宣ノ事ハ宮内大臣ニ委セラレタル處華族及宮内官吏ノ敍位ヲ除ク外ハ從前ノ如ク内閣總理大臣ヲ經テ上奏スヘシ内閣總理大臣奏聞裁可ヲ經タル後之ヲ宮内大臣ニ移シ宮内大臣之ヲ奉宣ス

○第二十一類 服務懲戒

○官吏服務紀律明治二十年七月
勅令第三十九號

沿革略記 明治十五年七月第四十四號達ヲ以テ行政官吏服務紀律ヲ定
ム○同年同月第四十五號ヲ以テ行政官吏服務紀律ハ司法官
吏ニ通用スヘキ旨ヲ達ス○十六年四月第十八號達ヲ以テ地方巡察
條規ヲ定ム○二十年七月勅令第三十九號ヲ以テ前令ヲ改正シ官吏
服務紀律トス

朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

官吏服務紀律

第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法
律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意

見テ述ルコトヲ得

第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹慎懇切ナルコトヲ務ムヘシ

第四條 官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハ

ス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ亦同様トス

裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受

クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限り供述スルコトヲ得

第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス

第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地

ヲ離ル、コトヲ得ス

第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員

トナルコトヲ得ス

第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝

儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其饗燕ヲ受クルコトヲ得ス

一 官廳ノ工事ヲ受負フ者

一 官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者

一 官廳ノ補助金ヲ受クル起業者

一 官廳ノ用品ヲ調達スル者

一 官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス

第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ

第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ

其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レズ

第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

○官吏商業區分明治八年四月
第六十五號達

官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候處其區分判然タラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相達候事

但從前ノ指令之レニ抵觸スルモノハ廢止ト可心得事

第一條

一凡ソ官吏タルモノ并ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ生産ヲ買入レ製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業一切禁止ノ事

但神宣「教導職區戶長郵便取扱人學區取締役」及ヒ等外吏ノ分ハ此限ニアラス(八年第七十六號
達ヲ以テ但書改正)

九年第六百六十九號
 布告例第二十條
 何レノ職族
 ルニハラス
 利高相ハ大
 他省ノ官員トモ
 銀行ノ事務モ
 關係ノ事務ニ
 株主ナル者ハ
 許サズ

第二條

一官吏ノ家族自己ノ財ヲ以テ商賈ノ業ヲ營メント欲スル者ハ分籍別居ノ上相營ムヘキ事

第三條

一左ノ數件ハ商賈ノ業ニアラサルニ付官吏タル者ト雖トモ制禁ニアラサル事

但商賈同様ノ店ヲ開クハ不相成候事

一鑛山借區營業及ヒ田地ヲ所有シ其利ヲ獲ル事(八年第八十七號達ヲ以テ本項改正)

一田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ獲ル事

一金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事

一所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣拂事

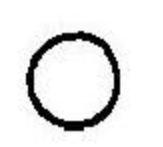
○官吏會社ノ株主トナルヲ得ルノ區分明治十四年五月第三十七號達

官吏商業區分ノ儀ニ付テハ兼テ相達候趣モ有之候處自今道路河港ノ修

築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖産ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相達候事

○官吏職務上直接關係アル會社ノ株主タルノ禁明治十四年五月內達

官吏ノ儀ハ濫リニ商社ニ加入等不相成ハ勿論今般第三十七號達部内ノ會社ト雖モ其會社ニ直接關係ノ職務アル者株主タルハ不都合ニ候條右等ノ儀無之様取締可致此旨及內達候也



○皇宮警察官服務規程明治十五年五月宮內省達第六號

皇宮警察官服務規程左ノ通相定ム

皇宮警察官服務規程

第一條 皇宮警察官ハ宮城離宮禁苑ノ巡邏查察諸御門ノ開閉通行人及出入

皇宮警察官服務規程

物品ノ検査惡疫流行病ノ豫防火災豫防及消防ノ事ヲ掌ル(二十一年十二月宮内省達ヲ以テ皇居トアルヲ宮城ト改ム)

第二條 警察長ハ主殿頭ノ命ヲ承ケ前條ノ主務ヲ總管シ警部以下ヲ指揮監督ス警察次長ハ警察長ノ職務ヲ佐ケ其事故アルトキハ之ヲ代理ス

第三條 警部以下ハ警察長ノ命ヲ受ケ第一條ニ掲クル職務ヲ執行シ及署中ノ庶務ヲ整理ス(二十一年十二月宮内省達ヲ以テ本條改正)

交代時限ハ時々警察長ノ定ムル所ニ依ル

第四條 前條服務規程ニ關スル細則ハ主殿頭ノ認可ヲ經警察長之ヲ定ム(二十一年十二月宮内省達ヲ以テ第四條以下第十一條迄ヲ剛除シ第十二條ヲ第四條トス)

○官吏懲戒例明治九年四月第三十四號達

沿革略記 明治三年十二月新律綱領中職制律ヲ設ケ尋テ六年六月第二百六號ヲ以テ改定律例ヲ定ム○九年四月第四十八號布告ヲ以テ新律綱領改定律例中ノ職制律ヲ廢シ自今官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ任シ懲戒セシム○同年同月第三十四號達ヲ以テ官吏懲戒例ヲ定ム

今般官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏懲戒例

第一條 自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ

第二條 懲戒ノ法三種トス第一譴責第二罰俸第三免職

第三條 譴責ハ懲戒ノ輕キモノトシテ本屬長官ヨリ譴責書ヲ付ス

第四條 罰俸ハ一月分拾分ノ壹ヨリ少カラス三月分ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ(十三年第四號達ヲ以テ次項共改正)

俸ヲ追スルノ法其一月給俸半額以下ハ一月俸中ニテ追了シ其以上ハ毎月

俸給ノ半額ヲ領置シ數滿テ大藏省ニ送付ス

第五條 懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本屬長官ノ意見ニ從ヒ其奏任ハ具狀奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム

但懲戒ニ由ルニアラスシテ免職スル者ハ長官旨ヲ諭シ本人ヨリ辭職ノ願ヲ差出サシメ然後ニ免許スヘシ

第六條 諸省長官ハ所屬奏判任官ヲ懲戒ス

第七條 府縣奏任官ハ「太政大臣」之ヲ懲戒ス府縣並警視廳判任官ハ其長官之ヲ懲戒ス

第八條 「四等以下」ノ判事ハ司法卿之ヲ懲戒ス「府縣官判事ヲ兼ル者」其所屬判任官ニ於ルハ他ノ奏任以上府縣官ノ叶議ヲ得タル後之ヲ懲戒ス

第九條 府縣長官警視長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其譴責ヲ專行スルヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ「內務卿」ニ届出ツヘシ

第二十三
第六十八
本類ニ載ス
本類ニ載ス

府縣官判事ヲ兼ル者其所屬判任官ノ罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ「司法卿」ニ届出ツヘシ

第十條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ本屬長官專ニ處分スルヲ得ス

○官吏懲戒例ハ神官并準官吏等外等へ通用ス明治九年六月
番外達

本年四月第三十四號達官吏懲戒例ノ儀ニ付尙又左ノ通相達候事

一 準官吏並ニ等外吏ハ本例ニ照シテ處分シ備其他種々ノ名義ヲ以テ公事ニ關スル者ハ本屬長官ノ見込ヲ以テ適宜處分スヘシ

一 官國幣社神官并ニ「教導職」ノ過失發見スル時ハ所在地方官ヨリ其狀ヲ具シテ「教部省」へ届出ヘシ

一 (十三年第二十三號)
(達ヲ以テ本項廢止)

一 巡查及ヒ學校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限

十七年第十九
號布達ヲ以テ
施行ス
第十年第四號
布達ヲ以テ教
部省ハ事務
スハ内務省ヘ
付

ニアラス

一「民費」ヲ以テ給俸ニ充ル者ノ罰俸ハ各其「民費」ニ割戻スヘシ

○長官懲戒處分心得明治九年四月
番外達

今般官吏懲戒例相定候ニ付テハ各長官ニ於テ懲戒處分左ノ通可相心得
此旨内達候事

長官懲戒處分心得

一各長官ハ平生其所屬官ヲ監督シ、若シ過失アレハ懲戒例ニ依リ處
分スヘシ

一過失トハ過誤失錯不注意ニ出ル者ヲ云、其怠惰ニ出ル者亦過失ト
ス、其素行脩マラスシテ官吏ノ体面ヲ汚ス者、亦過失ニ准シテ懲戒
ヲ加フヘシ

一過失ノ事ニ害アル者ハ、重キニ從テ論ス、其事ニ害アリト云レ猶ホ
改正スヘキ者、及ヒ事ニ害ナキ者ハ、輕キニ從テ論ス但シ其情狀ニ

從ヒ輕重ヲ酌量スルハ、專ラ本屬長官ノ所見ニ任ス

一同僚ノ官吏、共同シテ過失ヲ犯ス者ハ、主任ノ上官(省務ハ省長、寮司
務ハ寮司長、廳務ハ廳長、一科一局一掛ノ事務ハ、各々其主任長)其責
ニ任スヘシ、而シテ次官以下、遞ニ從テ以テ論ス、下官其造意ヲ以テ
處行シ、猶ホ上官ノ許可ヲ得タル者ハ、上下官共ニ均ク其責ニ任ス
ヘシ、下官職權内ノ事ヲ以テ處行シタル者ハ、上官其責ニ任セス、
若シ下官其職權ヲ越エ、專斷處行シタル者ハ、重ニ從テ論ス

一所屬官自ラ過失ヲ覺察シ、進退伺ヲ捧クルルハ、本屬長官、之ヲ推糾
シ、其過失ニ止ムル者ハ、例ニ依リ處分ス、其有心故造ニ涉リ司法官
ニ付スヘシトスル者ハ、懲戒例第十條ニ依リ、長官ヨリ之ヲ司法官
ニ移ス、司法卿若シハ檢事其檢事ヲ
置カサル地方ニ於テハ判事若シ司法官其有心故造ニ非ス又
律ニ觸レサルコト判スルトキハ、之ヲ本屬長官ニ還付シ長官ハ仍
ホ懲戒例ニ依リ處分スルコトヲ得

一懲戒ニ依リ免職スル者ハ、ニケ年以上ヲ經ルノ後ニ非レハ、再タヒ
收用スルコトヲ許サス

一懲戒ニ依ルト否トヲ論セス、凡ソ免職スル者ヲ他ノ官廳ヨリ收用
セントスルトキハ、必ス舊本屬長官ニ通牒シテ、其意見ヲ問ヒ答復
ヲ得ヘシ

一過失ニ由ラスシテ免職スル者ハ、長官ヨリ旨ヲ諭シ辭表ヲ捧ケシ
ム、其旨ニ達ヒ辭表ヲ捧ケサル者ハ直チニ免職スルコトヲ得

一舊任中過失アル者轉任ノ後、發覺若クハ自ラ覺擧スル者ハ舊任
本屬長官ト通牒シテ新任本屬長官ヨリ之ヲ懲戒スヘシ

○官吏懲戒例ハ府縣立町村立學校長教員及書記へ適用十六年五月
官吏懲戒例並ニ行政官吏服務紀律等ノ儀ハ府縣立町村立學校長教員
及府縣立學校書記へモ適用スヘキコト勿論ニ候此旨相達候事
○戶長職務上ノ過失ハ官吏懲戒例ニ依ル十八年二月
內務省甲第四號

戶長職務取扱上過失アルトキハ總テ官吏懲戒例ニ依リ處分スヘシ但
明治十一年乙第八十號達第五項ハ廢止ス
右相達候事

○稅關監吏補賞罰規則明治二十三年十月
勅令第二百十八號

朕稅關監吏補賞罰規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

稅關監吏補賞罰規則

第一條 監吏補其職務上勤勞アル者ハ事ノ大小難易ニ由リ每事五圓以下ノ
賞ヲ與フ

第二條 監吏補其職務上怠慢過失アル者ハ情狀ニ由リ左ノ懲罰ニ處ス

第一 譴責

第二 罰俸

第三 免職

第三條 罰俸ハ月俸額百分ノ一以上一箇月以下トス

第四條 罰俸ハ毎月俸給ヲ以テ納付セシム但月俸額三分ノ一ヲ超ルコトヲ得ス

第五條 罰俸ニ處セラレタル者罰俸完納前退官免職又ハ死去スルトキハ之ヲ追徴セズ

第六條 大藏大臣ハ本規則ノ執行ヲ税關長ニ委任スルコトヲ得

○海軍各軍法會議主理錄事服務並定員明治二十三年十月勅令第二百四十六號

朕海軍各軍法會議主理錄事服務並定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 各軍法會議ノ上席主理ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ執行スルノ外其軍法會議ノ庶務ヲ幹理ス

第二條 各軍法會議ノ上席主理ハ長官ヨリ處刑及治罪ニ關スル諮問アルト

キハ其意見ヲ述フ

第三條 各軍法會議ノ主理ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ執行スルノ外上席主理ノ指揮ヲ受ケ軍法會議ノ庶務ニ從事ス

第四條 各軍法會議ノ錄事ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ執行スルノ外主理ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事シ又書類保存ノ事ヲ掌ル

第五條 主理錄事ノ定員左ノ如シ

東京軍法會議	主理	四	錄事	四
橫須賀鎮守府軍法會議	主理	三	錄事	五
吳鎮守府軍法會議	主理	三	錄事	四
佐世保鎮守府軍法會議	主理	三	錄事	四

第六條 主理試補ハ二人錄事見習ハ三人ヲ以テ定員トス

○判事懲戒法明治二十三年八月
法律第六十八號
朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
判事懲戒法

第一章 總則

第一條 凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テス
ヘシ

第一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二 官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章 懲罰

第二條 懲罰ハ左ノ如シ

第一 譴責

第二 減俸

第三 轉所

第四 停職

第五 免職

第三條 前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所
之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以內ヲ減ス

第五條 轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併
セ科スルコトヲ得

第六條 停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セス

第七條 免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ
失フ

七日ノ期間内ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條 抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條 開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條 開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條 懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄区域内ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條 下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得
被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條 受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時内ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條 檢事ハ三日内ニ意見ヲ付シ記録ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條 懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條 懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條 辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條 口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノ

トス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條 被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用井ルコトヲ得

第三十四條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條 判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日内ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條 被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條 評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規定ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規定ニ從テ

第三十八條 被告及檢事ハ十四日ノ期間内ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條 控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條 懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ

對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四十一條 懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條 控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限り之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規定ヲ適用ス

第四十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ

第四十五條 調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規定ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條 懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條 懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ謄本ヲ差出スヘシ

第四十八條 懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章 職務停止

第四十九條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セララルモノトス

第一 刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ

第二 刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三 懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條 刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セララルモノトス

第五十一條 懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

刑事裁判手續中何何ノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章 懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第五十四條 刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章 補則

第五十六條 懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

○巡查懲罰例 明治九年八月
内務省乙第九十二號達

沿革畧記 明治八年十二月内務省乙第六十八號達ヲ以テ巡查懲罰例
ヲ定ム○九年八月内務省乙第九十二號達ヲ以テ前令ヲ改正
ス

巡查懲罰例別紙ノ通改正候條此旨相達候事

(別紙)

巡查懲罰例

第一條 凡職務ノ規則ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アル者ハ其情狀ヲ審按シ俸給一ヶ月百分ノ一ヨリ少カラス一ヶ月ヨリ多カラサル罰金ヲ科シ輕キ者ハ同責ニ止ム

第二條 凡犯狀ノ職務ヲ耻カシムルニ係ル者ハ免職ス

第三條 凡罰金未々完納セサル中免職死亡等ニ係ル者ハ追徴スルヲ免ス

第四條 凡罰金ハ毎月ノ俸金ヲ控除シテ完納セシム

但月俸ノ三分一ヲ過クルコトヲ得ス

第五條 凡官物ヲ遺失及ヒ毀損スル者ハ相當ノ罰金ヲ科シ尙其代價ヲ賠償セシム

○看守懲罰 十六年四月
内務省乙第十七號達

看守懲罰ノ義ハ自今巡查懲罰例ニ準據スヘシ此旨相達候事

○第二十二類 任免

○文官試験試補及見習規則 明治二十年七月
勅令第三十七號

朕文官試験試補及見習規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試験試補及見習規則

第一 通則

第一條 本令ニ於テ文官ト稱スルハ委任判任ノ文官ヲ總稱シ試補ト稱スル

ハ勅令第十三號學位令ニ依リ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケ又ハ法科大
學文科大學及舊東京大學法學部文學部ヲ卒業シ又ハ高等試験ヲ經當選
シテ高等官ノ實務ヲ練習スル者ヲ云ヒ見習トハ官立府縣立中學校又ハ之
ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法
省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ヲ經當選シテ判任官ノ事務ヲ練
習スル者ヲ云フ

勅令第十三號
學位令ハ第十
六類ニ載ス

「本令ニ於テ司法官ト稱スルハ裁判官及檢察官ヲ總稱ス」

第二條 第三條第四條ニ掲クルモノヲ除クノ外本令ニ依リ定規ノ試験ヲ經當選シタル者ニアラサレハ試補及見習ニ任命スルコトヲ得ス又實務練習ヲ終リタル者ニアラサレハ本官ニ任スルコトヲ得ス

第三條 三年以上分科大學ノ教授ニ任シタル者ハ高等試験及實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任シ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ハ高等試験ヲ要セス試補ニ任スルコトヲ得

「司法官タルノ資格ヲ有スル者ニシテ他官ヨリ司法官ニ轉スルトキ又ハ司法官タルノ資格ヲ有シ三年以上代言人タル者ハ實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得」

第四條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通

試験ヲ要セス判任官見習ヲ命スルコトヲ得

第五條 試験ヲ分テ高等試験普通試験ノ二種トス

高等試験ハ試補ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニシ普通試験ハ判任官見習ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニス

第六條 試験ハ筆記口述ノ二様トス筆記試験ニ落第シタル者ハ口述試験ヲ受クレコトヲ得ス

第七條 試験ハ筆記口述ノ二様ニ就キ各科目ノ點數ヲ合算シタル一定ノ平均點數ヲ以テ合格ヲ定メ時々官廳ノ需要ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ合格者中ヨリ選抜シテ當選者ヲ定ム但一科目ニ付一モ點數ナキ者ハ合格者トスルコトヲ得ス

第八條 前條ノ選抜ニ當テサル者ハ合格者ト雖モ再ヒ文官ノ任用ヲ望ムトキハ更ニ本令ニ依リ試験ヲ受クヘシ

第九條 試験ニ必要ノ參考書類及紙墨ハ試験室ニ備ヘ置キ受験人之ヲ携帶

スルコトヲ許サス

第十條 試験當選者ノ姓名ハ官報ヲ以テ公告ス

第十一條 第九條ヲ犯シ若クハ不正ノ方法ヲ以テ當選シ他日其事ノ發覺シタルトキハ當選ノ効ナキモノトス

第十二條 第九條ヲ犯シタル者及第十一條ノ處分ヲ受ケ又ハ不正ノ方法ヲ以テ當選セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十三條 第十八條第二十三條第三十三條第三十六條ノ履歷書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條 試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 本令施行ノ後五箇年間ハ事務練習中ト雖モ本官ノ缺アルトキハ其練習ノ滿期ヲ待スシテ本官ニ任スルコトアルヘシ

五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任用スルコトヲ得

廿三年勅令第
八號第三條參
照本類ニ載ス

第二 高等試験

第十六條 高等試験ハ各官廳ノ須要ニ從ヒ時々東京ニ於テ試験委員之ヲ行フ其期日及場所ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十七條 高等試験ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

一 丁年以上ノ男子

一 外國ニ於テ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ三年以上其學科ヲ修學シタル旨ヲ證明スル證書ヲ有スル者

一 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 高等中學校及東京商業學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者

第十八條 試験願書ハ其時々官報ヲ以テ公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

廿三年勅令第
八號第一條參
照本類ニ載ス

一 出願者ノ履歷書

- 一 第十七條ニ掲クル卒業證書及修學證書ノ寫
- 一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第十九條 高等試験ノ科目ハ試験ヲ行フ年毎ニ司法官又ハ行政官ノ別ニ依リ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ「文官試験局長官」之ヲ選定シ試験ノ期日三箇月前ニ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二十條 第三條第四條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技藝ヲ要スルモノハ別段ノ試験法ヲ定ムルマテ各官廳ノ需要ニ從ヒ試験ヲ經スシテ之ヲ任用スルコトヲ得

第三 試補

第二十一條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ定限ヨリ短カラサル期限間事務ヲ練習スヘシ

第二十二條 各官廳試補ノ定員ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二十三條 法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ニシテ行政官「又ハ司法官」ノ試補ヲラシコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ取添其旨ヲ「文官試験局長官」ニ出願スヘシ（二十一年勅令第九十八號ヲ以テ取添ノ下）
（高等試験期日三十日前ニノ十一字ヲ削ル）

- 一 出願者ノ履歷書
- 一 學位又ハ卒業證書ノ寫
- 一 身分年齢

第二十四條 行政官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ地方官廳一箇年半ハ中央官廳ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十五條 「司法官」ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ治安裁判所一箇年半ハ始審裁判所ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十六條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習スルニ付テハ其主務長官ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第二十七條 主務長官ハ事務練習ノ終ニ於テ試補練習ノ功程ヲ所屬大臣ニ具狀シ其意見ヲ提出スヘシ

第二十八條 所屬大臣ハ練習期限中ト雖モ試補官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタルモノト認ムルトキハ試補ヲ免スヘシ

第二十九條 在職ノ判任官ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス缺員アル場合ニ於テハ直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第三十條 試補ノ命ヲ承ケ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習セサル者ハ試補ヲ免スヘシ

第四 普通試験

第三十一條 中央官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官廳ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々其官廳ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十二條 地方官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官廳ノ需ニ應シ府縣ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々普通試験委員長ヨリ新聞

紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十三條 試験願書ハ本人自ラ之ヲ認メ其時々公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ普通試験委員長ニ差出スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十四條 普通試験ノ科目ハ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ普通試験委員之ヲ選定シ「文官試験局長官」ノ認可ヲ經テ試験ノ期日一箇月前ニ官報ハ又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第五 判任官見習

第三十五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ニ及第シタル者ニ判任官見習ヲ命スヘシ判任官見習ヲ命セラレタル者ハ所屬長官ノ指命スル所ニ就キ二箇年ヨリ

文官試験試補及見習規則

廿三年勅令第
八號第五條參
看本類ニ從ス

短カラサル期限間事務ヲ練習シ判任官ノ缺員ヲ待テ本官ニ任セラルヘシ
 第三十六條 官立府縣立中學校又ハ之ト官等ナル官立府縣立學校及帝國大
 學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ判任
 官見習タラシムコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ添ヘ主務官廳ニ出願スヘシ(二十
 勅令第九十八號ヲ以テ望ム者ハノ下普通)
 試驗期日三十日前ニノ十一字ヲ削除ス)

- 一 出願者ノ履歷書
- 一 卒業證書ノ寫

一 身分職業年齡及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十七條 所屬長官ハ判任官見習官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタル者ト認
 ムルトキハ判任官見習ヲ免スルコトヲ得

第三十八條 本令施行ノ前二箇年以上各官廳ニ於テ雇員トナリタル者ニシ
 テ事務ニ熟練シタル者ト本屬長官ニ於テ認ムルトキハ試驗ヲ要セス直ニ
 判任官ニ任スルコトヲ得

第三十九條ハ本令ハ明治二十一年一月ヨリ施行ス

○文官試驗試補及見習規則ニ關スル細則二十一年七月十八號
 勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則ニ依リ細則ヲ定ムルコト左ノ
 如シ

文官試驗試補及見習規則ニ關スル細則

- 第一條 高等試驗ハ左ノ科目中司法官ハ五科目以上行政官ハ三科目以
 上ヲ以テ試驗ヲ行フノ定限トシ試驗ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前
 二文官試驗局長官官報ヲ以テ之ヲ公告ス(二十二年閣令第六十一號ヲチ
 別)
- 一 民法
- 二 訴訟法
- 三 刑法
- 四 治罪法
- 五 商法
- 六 憲法
- 七 行政
- 八 財政

九 理財

十 國際法

第二十三號勅令
第八號第六條

- 第二條 (二十二年閣令第二) 高等試験ハ國語及漢字交リノ文ヲ以テ之ヲ行フ特ニ外國語及外國文ヲ以テ試験ヲ受ケンコトヲ願フ者ハ豫メ「文官試験局長官」ノ許可ヲ受クヘシ
- 第四條 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則第三條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外敎官技術官其他特別ノ學術技藝ヲ要スル者ノ試験ヲ爲ストキハ其試験ノ科目ハ試験ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前ニ「文官試験局長官」報ヲ以テ之ヲ公告ス
- 第五條 高等試験ハ勅奏任官ニシテ「文官試験局長官」ノ許可ヲ得タル者ノ外傍聴ヲ許サス
- 第六條 筆記試験ハ受験人總員ヲ一室又ハ數室内ニ閉鎖シ一室毎ニ試験委員一名監視シテ之ヲ行フヘシ但受験人一名ナルトキハ試験委員二名監視スルヲ要ス
- 第七條 筆記試験ノ問題ハ「文官試験局長官」定ムル所ノ方法ニ依リ各受験人ヲシテ之ヲ知悉セシメ豫定ノ時間内ニ答辯書ヲ差出サシムヘシ
- 第八條 筆記試験ノ問題ノ數ハ各科目ニ付試験委員ノ議定シタル所ニ依ル

第九條 試験室ニ備ヘ置クヘキ必要ノ参考書類ハ法律類集官報其他公然ノ法章ニ限ル

第十條 口述試験ハ筆記試験ヲ終リタル後試験委員長ノ上席ヲ以テ試験委員半數以上ノ列席ニ於テ受験人一名毎ニ試問シテ即時答辯ヲ爲サシムヘシ(二十二年閣令第二十一號ヲ以テ)

第十一條 口述試験ハ各受験人ニ付半時間以上一時間以内トス

第十二條 高等試験ハ受験人ノ果シテ學理上ノ原則ニ通曉スルヤ現行ノ法律命令ヲ解得スルヤ又法律命令ヲ實務ニ應用シ及之ヲ口述スルニ確實敏捷ナルヤ否ヤヲ試験スルヲ以テ目的トスヘシ

第十三條 高等試験ヲ經タル各科目ノ點數及其全體ノ效果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ試験委員ノ議定シタル平均點數ニ依ル

第十四條 當選者ハ各合格者ニ就キ試験委員長ノ具狀スル所ニ依リ各官廳ノ需要ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ之ヲ定ム

第十五條 前條ノ合格者中ヨリ當選者ヲ査定スルハ其試験ヲ行ヒタル日ヨリ四週間以内ニ之ヲ結了シ官報ヲ以テ其姓名ヲ公告スヘシ

第十六條 試験委員長ハ試験委員ノ職務ニ屬スル議決ノ數ニ入ラス若シ其議決ニ關シ試験委員ノ説可否相半スルトキハ試験委員長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 受験人ハ其試験ヲ受クルノ際試験手續ニ關スル規則及試験

文官試験試補及見習規則

委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ監視ノ試験委員ニ於テ退室ヲ命シタルノ後之ヲ試験委員長ニ報告シ其試験ヲ拒ムコトヲ得

第十八條 高等試験ノ手續ニ關スル細目ハ文官試験局長官ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 普通試験ニ關スル細則ハ文官試験局長官ノ認可ヲ經各官廳ノ普通試験委員ノ定ムル所ニ依ル

○文官試験試補及見習規則中司法省舊法學校正則部卒業生ニ關スル規定ハ司法省舊法學校正則部卒業生ニモ適用スルモノトス

○試補及見習ノ待遇並任用方明治二十年十一月勅令第五十七號

朕試補及見習ノ待遇竝ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則ニ據リ試補及見習ヲ命セラレタル者ノ待遇ハ試補ヲ奏任トシ見習ヲ判任トス

同則ニ據リ試補及見習ヲ本官ニ任用スルニハ試補ハ奏任官四等以下トシ見習ハ判任官五等以下トス

○文官技術官等ノ試補及見習俸給支給方二十一年三月勅令第二號
明治二十年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則ニ據リ試補ヲ命セラレタル者ニハ年俸六百圓以下見習ヲ命シタル者ニハ月給二十五圓以下其官廳ノ定額内ニ於テ所屬長官便宜之ヲ給スルコトヲ得
明治二十年十二月勅令第二十八號ニ掲グル試補ノ俸給ハ年俸九百圓以下判任官見習ノ俸給ハ月給四十圓以下其官廳ノ定額内ニ於テ所屬長官便宜之ヲ給スルコトヲ得

○文官受験者ノ資格及本官ノ任用規程明治二十三年二月勅令第八號

朕文官試験ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

第一條 前ニ奏任文官ヲ勤メタル者及滿三年以上判任文官ヲ勤續シタ

ル者ハ明治二十年勅令第三十七號ニ依リ高等試験ヲ受クルコトヲ得
第二條 明治二十年勅令第三十七號ニ依リ高等試験ヲ受ケテ合格シタル者ハ「文官試験局長官」ヨリ高等試験合格證書ヲ付與スヘシ
高等試験合格證書ヲ得タル者ハ官廳ノ需要アルニ當リ高等官試補ニ任スルコトヲ得

第三條 滿三年以上奏任文官ヲ勤メ退官シタル者及滿五年以上判任文官ヲ勤メ退官シタル者ハ試験及事務練習ヲ要セスシテ前官同等若ハ其ノ以下ノ文官ニ任スルコトヲ得

第四條 奏任又ハ判任ノ文官ヨリ轉任シタル官立學校ノ教官及府縣立學校ノ職員ハ更ニ前官同等若ハ其ノ以下ノ文官ニ轉任スルコトヲ得
第五條 各官廳ハ其ノ需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ此ト同等ナル官立府縣立學校及特別認可學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ明治二十年勅令第三十七號ニ依リ普通試験ニ及第シタル

者ヲ擧ケテ直チニ判任文官ニ任スルコトヲ得

第六條 試験ハ本邦ノ成法慣例及一般ノ學理ヲ以テ問題ト爲スヘシ但シ受験者應答ヲ爲スニ當リ外國ノ法例ヲ參照ニ引擧スルコトヲ得
特別ノ必要ニ依リ外國語ヲ試験問題ト爲スハ前項ノ限ニ在ラス
第七條 本令ハ明治二十年勅令第三十七號第二十條ニ依リ試験ヲ經スシテ任官シタル者竝ニ明治二十一年以後郡區長ノ試験ニ及第シテ任官シタル者ニ適用セス

○判任官高等試験ヲ受クル者明治二十年十二月勅令第六十四號

朕判任官高等試験ヲ受クルコトヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則施行ノ後五箇年間ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官「五等以上」ニ叙セラレタル者ハ同則第十

廿三年勅令第八號參看

七條第五項ニ準シ高等試験ヲ受クルコトヲ得其當選シタル者ノ本官ニ任スルハ同則第二十九條ニ據ル

○在職判任官ニシテ高等試験ノ當選者本官ニ任用年限二十一年十一月ニシテ直ニ本官ニ任スルヲ得ル者ハ在職三年ニ滿ル者ニ限ル若三年ニ滿サル者ハ先試補ニ任用シ前後ヲ通算シテ三年ニ滿ルヲ待テ本官ニ任スルモノトス

○高等商業學校主計專修科ノ卒業生判任官見習ニ任用方二十二年三月高等商業學校主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命スルコトヲ得

○特別認可學校卒業生判任官見習ニ任用方二十二年十月文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命スルコトヲ得

○教官技術官ノ資格ヲ有スル者行政官ニ任用方明治二十年十一月 勅令第五十八號

朕教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ行政官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

各般ノ學務及特別ノ學術技藝ニ關スル行政官ハ教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ之ニ任用スルコトヲ得

○技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者任用例規二十年十二月 勅令第二十八號本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則第二十條ニ據リ別段ノ試験法ヲ定ムルマテハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者ヲ任用スルニハ左ノ例規ニ依ルヘシ

- 一 奏任官ハ本則第三條ニ準シ各種ノ學術技藝ニ就キ一定ノ資格アル者又ハ第十七條ニ準シ其經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認ムヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書ノ寫身分年齡等ノ書類ヲ添ヘ文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經各省大臣ヨリ奏問ノ手續ニ及フヘシ二十三年閣令第一號ヲ以テ改正
- 一 判任官ハ本則第四條ニ準シ各種ノ學術技藝ヲ修メ一定ノ資格アル者ヲ命シ其他ノ者ハ經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認ムヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書ノ寫身分年齡等豫メ普

通試験委員長ノ調査ヲ經テ之ヲ命スヘシ
本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則其他之ニ關スル法令中
試験ニ關スル條項ノ外通則試補判任官見習ニ就キ規定シタルモノハ技
術官及特別ノ學術技藝ヲ要スルモノニモ適用スルモノトス

○東京農林學校及舊駒場農學校卒業生任用方明治二十二年十月
勅令第一百十號

朕東京農林學校及舊駒場農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布
セシム

東京農林學校及舊駒場農學校本科卒業生ハ高等試験ヲ要セス其修メタ
ル學科ニ關スル行政官試補ニ同校別科舊速成科舊簡易科及舊駒場農
學校別科卒業生ハ普通試験ヲ要セス其修メタル學術ニ關スル判任官見
習ニ採用スルコトヲ得

○札幌農學校卒業生任用方明治二十二年十月
勅令第一百二十七號

朕札幌農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
札幌農學校農學科及工學科卒業生ハ高等試験ヲ要セス其修メタル學科
ニ關スル行政官試補ニ採用スルコトヲ得

○外務省派遣清國留學生判任官ニ任用方明治二十二年二月
閣令第五號

外務省派遣清國留學生卒業生ニシテ在清國公使館領事館又ハ在香港領
事館附語學生ト爲リ事務ヲ練習シタル者ハ直ニ同省判任官ニ任スルコ
トヲ得

○税關監吏及同補任用方明治二十三年七月
勅令第一百四十四號

朕税關監吏及監吏補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
税關監吏及監吏補ハ大藏大臣別ニ試験規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ
得其規則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他

ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

○理事主理ノ試験及試補練習方明治二十年三月勅令第十號
朕理事主理ノ試験及試補ノ練習ニ關スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

理事及主理ハ高等試験ニ於テ司法官ノ例ニ依リ理事試補ハ陸軍省若クハ陸軍軍法會議主理試補ハ海軍省若クハ海軍軍法會議ニ於テ三年以上事務ヲ練習セシム

○陸海軍士官並同官以上文官任用方明治二十年十二月勅令第六十三號
朕陸海軍士官並同官以上ノモノ文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸海軍士官並ニ同等官以上ノモノハ更ニ試験ヲ要セス文官ニ任用スル

コトヲ得

○陸軍下士文官採用規則明治二十年十二月勅令第八十三號
朕陸軍下士文官採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍下士文官採用規則

第一條 陸軍下士ニシテ左ニ掲クル者ハ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得(二十三年勅令第八十六號ヲ以テ各項共改正)

- 一 戰役若クハ公務上ノ傷痕疾病ニ因リ免官シ尙文官ノ勤務ニ堪ヘ且伎倆證明書ヲ所持スル者
- 二 現役七箇年以上服役滿期ノ下士ニシテ伎倆證明書ヲ所持スル者

第二條 陸軍下士ハ本人ノ請願ニ因リ前條恰當ノ者ハ試験ヲ要セスシテ判任官トナルコトヲ得(二十三年勅令第八十六號ヲ以テ本條改正)

第三條 海軍省ヲ除クノ外各官廳ニ於テ判任官ヲ任用スルニハ少クモ

五人ニ付一人ハ陸軍下士ノ文官請願者ヲ以テス可キモノトス

第四條 文官タラシコトヲ望ム者ハ服役滿期前一箇月間又滿期若クハ

免役後三箇月間ニ之ヲ請願ス可シ(二十三年勅令第八十六號ヲ以テ改正)

第五條 請願者ニ於テ教官技術官タラシコトヲ望ム者アルトキハ之ヲ

採用セントスル官廳ニ於テ相當ノ試験ヲ施行スルコトヲ得

第六條 請願者ノ名簿ハ本人請願ノ順序ニ從テ調製シ之ヲ陸軍省ニ備

置ク可シ

第七條 請願者ノ採用ハ其同年内ニ係ルモノハ第一條各項ノ順序ニ從

ヒ其同項内ニ於テハ服役時日ノ多キ者ヨリ採用シ其服役時日ノ同シ

キ者ハ請願時日ノ順序ニ從ヒ採用ス可シ

本人ノ伎倆及任務ノ必要ニ依リテハ前項ノ順序ニ拘ハラズ採用スル

コトアルヘシ(二十三年勅令第八十六號ヲ以テ本項追加)

第八條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用スルトキハ陸軍省ニ照會シ直ニ本人ヲ其廳ニ呼出ス可シ

第九條 陸軍省ニ於テハ前條ノ照會ニ依リ第七條ニ照シ請願者ノ氏名及履歷書ヲ其官廳ニ交付ス可シ

第十條 請願者ニ於テ其請願ヲ取消サント欲スルトキハ陸軍省ニ届出可シ

第十一條 本則施行ニ要スル細則及伎倆證明書ノ規定ハ陸軍大臣之ヲ定ム可シ(二十三年勅令第八十六號ヲ以テ改正)

○陸軍下士文官採用細則二十一年二月號
陸軍下士官採用細則左ノ通定ム

陸軍下士官採用細則

第一條 本則本則採用規則ヲ云フハ陸軍下士官第一條ニ因リ文官奉職ヲ請願セント欲スル者ニシテ第一項ニ該當スル者ハ第二書式第二項ニ該

當スル者ハ第二書式及第三書式ニ據ルヘシ
(書式略之ニテ三年陸軍省令第二十五號)

第二條 本則第五條ニ因リ教官技術官タラシコトヲ望ム者及某官應ニ限リ奉職センコトヲ望ム者ハ其志願ノ應名ヲ願書中ニ記載シ又教官技術官志願ノ者ニ在テハ其習得セシ學術ヲ履歷書中ニ記載シテ差出ス可シ

但教官技術官タルノ志願ヲナシ合格セサル者ハ更ニ普通判任官タルヲ請願スルコトヲ得

第三條 本則第一條ノ資格ヲ有スト雖モ服役以來左ノ項目ニ觸ル、者ハ請願スルヲ得ス又既ニ請願ノ者ハ其請願無効ニ屬ス

一 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者

一 賭博犯ニ付懲罰ニ處セラレタル者

第四條 本則第一條ニ因リ請願スル者アルトキハ所管長官又ハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ其請願書類ヲ審査シ陸軍大臣ニ進達ス可シ

第五條 本則第五條ニ因リ各官應ニ於テ試験ヲ爲セシトキハ其試験ノ科目及ヒ合格不合格ノ旨ヲ直ニ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第六條 各官應ニ於テ請願者ヲ採用セシ上ハ直ニ其官等ヲ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第七條 教官技術官タラシコトヲ望ム者受験ノ爲メ官應ニ往復スル旅

費ハ總テ自辨タルヘシ

第八條 本則第十條ニ因リ其請願ヲ取消サント欲スルトキ又ハ請願者ノ身上ニ異動ヲ生シ或ハ轉居轉籍若クハ處刑等ニテ履歷上改正ヲ要スルコトアルトキハ其旨ヲ詳記シ最初願出ノ手續ニ因リ届出ツ可シ

○海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用方明治二十年十二月勅令第六十五號

朕海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍准士官並服役滿期ノ下士ハ普通試験ヲ要セス海軍省遞信省「鐵道局」ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

○東京電信學校ノ卒業生遞信技手ニ任用方明治二十一年五月閣令第八號

東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ遞信技手ニ任スルコトヲ得

○鐵道廳驛長任用方明治二十三年九月勅令第二百號

朕鐵道廳驛長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道廳驛長ハ鐵道廳長官別ニ試驗規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得

本令發布以前ヨリ驛長ノ職ニ就キ現ニ其事務ヲ執ルモノハ試驗ヲ要セ

ス直ニ驛長ニ採用スルコトヲ得

前二項ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニ非ラサレハ他ノ

判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○會計検査官任用資格明治二十二年六月勅令第八十號

會計検査官資格ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

會計検査院法第六條ニ依リ會計検査官ハ左ノ資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任

ス
第一 年齢滿三十歲以上ノ者

第二 五年以上検査官補又ハ五年以上他ノ高等行政官タル者但試補勤務年數ハ之ヲ算ス

○陸地測量官任用規則明治二十二年三月勅令第三十五號

朕陸地測量官任用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸地測量官任用規則

第一條 陸地測量師ハ陸地測量手中其任ニ適スル者ヲ選ミ陸地測量部修技所ニ於テ二箇年以上高等ノ學科ヲ修業セシメ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任

第二條 陸地測量手ハ陸地測量部修技所生徒ノ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任
ス

第三條 本則ニ依リ陸地測量官ニ任セラレタル者他ノ技術官ニ轉任セント
スルトキハ技術官任用ノ例規ニ依ル但他ノ技術官ヨリ轉任シタル者ハ此
限ニアラス

第四條 本則第一條第二條ニ掲クルモノ、外技術官其他學術技藝優等ノ者
ニシテ陸地測量部ニ於テ實地試業ノ上適當ト認ムルトキハ陸地測量官ニ
轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

第五條 本則施行ノ前陸地測量部ニ出仕スル技術官陸軍屬又ハ傭員ニシテ
陸地測量事業ニ從事シ學術技藝優等ナル者ハ陸地測量官ニ轉任セシメ若
クハ任用スルコトヲ得

○ 府縣立師範學校長特別任用令 明治二十四年八月
勅令第七十三號

朕府縣立師範學校長特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長特別任用令

第一條 府縣立師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者若クハ本
令施行ノ際尋常師範學校長ノ現職ニ在ル者又ハ五箇年以上教育ニ關スル
公務ニ從事シ現ニ四拾圓以上ノ月俸ヲ受クル判任官又ハ判任待遇ノ者ニ
限リ當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコト
ヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル府縣立師範學校長ハ高等試験ヲ經ルニ非サ
レハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附則

第三條 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

營林主事補及森林監守任用方

○營林主事補及森林監守任用方明治二十年十二月勅令第八十二號
 除營林主事補及森林監守任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 林區署所在地方ニ居住シ近接森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習ニ通曉セル者ヲ營
 林主事補及森林監守ニ選任スルノ必要アルトキハ農商務大臣定ムル所ノ採
 用規則ニ依リ之ヲ選任スルコトヲ得但該規則ニ依リ選任シタル營林主事補
 及森林監守ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○營林主事補及森林監守特別採用規則二十三年三月四號
農務省令第三號
 明治二十一年農商務省令第三號營林主事補及森林監守特別採用規則左ノ
 通改正ス

營林主事補及森林監守特別採用規則

- 第一條 大林區署所轄内ニ居住シ森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習ニ通曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スヘキ必要アルトキハ第二十六條ニ掲グル者ヲ除クノ外左ノ科目ニ就キ試験ヲ行フ
 - 一 現行法令講讀
 - 二 作文
 - 三 算術
 - 四 筆寫
 - 五 當該大林區署所轄内森林ノ狀況及土地ノ慣習
 - 六 簿記特別ノ必要アルトキ又ハ受
 - 七 地圖驗者ノ認ニ依リ之ヲ試験ス
- 第二條 試験ヲ受ケント欲スル者並ニ第二十六條ニ依リ試験ヲ要セスシテ任用セラル、者ハ相當ノ期限内當該大林區署所轄内ニ現住スル者又ハ居住セシコトアル者ニ限ル
- 第三條 試験ハ大林區署長ニ於テ署員二名以上ヲ選定シ委員ヲ命シテ之ヲ行ハシム
- 第四條 試験ノ期日ハ大林區署長之ヲ定メ試験期日二十日前便宜ノ方法ヲ以テ公告スヘシ
- 第五條 受験者ノ人員ハ採用スヘキ人員ノ五倍ヨリ少カラサル數ニ限ル

營林主事補及森林監守任用方

コトヲ得但シ此場合ニ於テハ試験ノ期日ト共ニ其ノ人員ヲ公告スヘシ
 第六條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験期日七日前迄ニ履歴書及第七條
 ノ證明書ヲ添へ願書ヲ當該大林區署ニ差出スヘシ其ノ願書履歴書ハ第
 一號及第二號書式ニ據リ本人自ラ之ヲ認ムヘシ
 第七條 試験出願者ハ身分職業年齢及免役延期豫備徵員一年志願兵等ニ
 關スル事項ヲ證明シタル市區町村長ノ證明書ヲ要ス
 第八條 第五條ノ場合ニ於テ受験出願者滿員ノトキハ試験期日七日前ト
 雖モ其ノ願書ヲ受理セス
 第九條 試験問題試験日時割及受験人心得ハ大林區署長之ヲ定メ各受験
 人ニ知悉セシムヘシ
 第十條 試験ノ問題ハ林務ニ關スル事項ヲ參酌シ專ラ實務ニ適應セシム
 ルコトヲ要ス
 第十一條 大林區署長ハ營林主事補ト森林監守ト試験問題ヲ異ニシ或ハ
 同一トナスコトヲ得
 第十二條 試験ハ筆記及口述ノ二種トス口述試験ハ筆記試験ヲ終リタル
 後之ヲ行フ
 第十三條 受験人ハ其ノ試験ヲ受タルノ際受験人心得及試験委員ノ命令
 ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ當該試験委員ヨリ直ニ退場ヲ命スヘシ其ノ退場
 ヲ命セラレタル者ハ當期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條 不正ノ方法ヲ以テ合格シ其ノ事ノ發覺シタルトキハ合格ノ効
 ナキモノトス
 第十五條 第十四條ニ依リ合格ノ効ヲ失ヒ又ハ不正ノ方法ヲ以テ合格セ
 ント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス
 第十六條 履歴書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコ
 トヲ得ス
 第十七條 試験各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ最上點トシ各科目ノ點數ヲ通
 計シ得ル所ノ和ヲ試験科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ諸科目平均點
 數トス諸科目平均點數ハ六十點ヲ以テ最下限トシ諸科目平均點數六十
 點未滿又ハ一科目ノ點數五十點未滿ナルトキハ合格者トスルコトヲ得
 ス
 第十八條 試験ヲ經タル各科目ノ點數及其ノ全體ノ効果ニ關シ合格者ヲ
 定ムルハ大林區署長上席ヲ以テ試験ニ列席シタル委員ノ議定シタル平均
 點數ニ據ル
 第十九條 大林區署長ハ試験ノ終リタル後二十日以内ニ各科目試験ノ成
 績ヲ取調ヘ其ノ需用ニ應シ人員ヲ限リ合格者中ヨリ選抜シテ當選者ヲ
 定メ應答ノ書類ヲ添付シテ上申スヘシ
 第二十條 試験合格者ノ氏名ハ其ノ試験ヲ終リタル日ヨリ七日以内ニ便
 宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

- 第二十一條 本則ニ依リ試験ヲ受ケテ合格シタル者ハ大林區署長ヨリ營林主事補又ハ森林監守試験合格證書ヲ附與スヘシ
- 第二十二條 試験ニ及第シ合格證書ヲ得テ當選シタル者ヲ採用スルトキハ見習ヲ命シ又ハ本官ニ任ス
- 第二十三條 營林主事補ト森林監守ト試験問題ヲ異ニシ森林監守ノ試験ニ及第シ採用セラレタル者ト雖モ事務熟練ノモノト認メタルトキハ別ニ試験ヲ要セス營林主事補ニ任用スルコトアルヘシ
- 第二十四條 試験合格證書ヲ得テ其ノ際當選セサル者ハ他日當該大林區署ニ於テ需用アルトキ別ニ試験ヲ要セス採用スルコトアルヘシ
- 第二十五條 試験合格者中其ノ試験ノ成績ニ據リ營林主事補ノ志願者ヲ森林監守ニ森林監守ノ志願者ヲ營林主事補ニ任用スルコトアルヘシ
- 第二十六條 左ニ掲グル者ハ試験ヲ要セス營林主事補及森林監守ニ任用ス
 - 一 前ニ判任文官ヲ勤メタル者
 - 二 陸軍滿期ノ下士及陸軍滿期ノ上等兵ニシテ下士適任證書ヲ有スル者
 - 三 滿二年以上巡查又ハ看守ヲ勤績セシ者
 - 四 滿二年以上上府縣立中學校公立小學校ノ教員ヲ勤績セシ者

- 五 本則施行ノ前ヨリ各官廳ノ雇員トナリ滿二年勤績ノ者
 - 第二十七條 本則ニ依リ任用スルモノハ大小林區署判任官官等俸給令別表ニ據リ其ノ初任營林主事補ハ九等上級以下森林監守ハ十等三級以下ノ月俸ヲ支給ス
 - 見習ヲ命シタルトキハ拾圓以下ノ月俸ヲ支給ス
 - 第二十八條 本則ニ掲クルモノ、外試験ニ關スル手續ハ大林區署長ノ定ムル所ニ據ル
- (書式略之)

○三等郵便局長任用方明治二十年十二月勅令第六十六號

朕三等郵便局長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三等郵便局長ハ其地ニ在住シ相當ノ資産アル者ヲ選任スルノ必要アルヲ以テ遞信大臣別ニ採用規則ヲ定メテ之ヲ選任スヘシ但該規則ニ依リ選任シタル三等郵便局長ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○三等郵便局長採用規則二十一年四月
明治二十年十月二十勅令第六十六號ニ據リ三等郵便局長採用規則左ノ通之ヲ定ム

三等郵便局長採用規則

第一條 三等郵便局長ハ左ノ各款ヲ具備スル者ヨリ之ヲ採用スヘシ
第一款 其三等郵便局所在地ニ在住スル者

第二款 實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者

但滿三年以上郵便又ハ電信事務ニ従事スル官吏ハ記名公債證書ヲ以テ之ニ充用スルコトヲ得(二十三年逓信令第十)

第三款 日常ノ算筆ニ通スル者

第四款 別ニ定ムル三等郵便局長服務規約ヲ遵奉スル者

第五款 年齢滿二十年以上ノ男子

第二條 誠實ニ職務ヲ奉シタル三等郵便局長老年又ハ疾病其他ノ事故ニ依リ其職ヲ辭スルカ或ハ在官中死亡セシトキ其嗣子又ハ相續人タル男子年齡滿十六年以上ニ及フモノハ第一條第五款ノ制限ニ拘ハラステニ採用スルコトアルヘシ

第三條 非戸主ニシテ其戸主實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者保證スルニ於テハ其本人ノ資産第一條第二款ニ適合セサルモ特ニ之ヲ採用スルコトアルヘシ

○北海道廳管下三等郵便局長採用方二十二年四月
北海道廳管下ノ三等郵便局長ハ當分ノ内三等郵便局長採用規則第一條第

二款ノ制限ニ滿タサル者ト雖採用スルコトアルヘシ

○三等郵便局長採用ノトキ郡區長戸長處辨方二十一年五月
三等郵便局長ノ採用ニ關シ郡區長戸長ハ逓信管理局長ノ照會又ハ依托ニ應

シ便宜處辨候様豫メ郡區長戸長ニ達示スヘシ

○三等郵便局長採用手續二十一年五月
三等郵便局長ヲ採用スルトキハ左ノ手續ニ依リ之ヲ執行スヘシ

第一條 三等郵便局長ノ採用ヲ要スルトキ逓信管理局長ハ三等郵便局長採用規則ニ合格スルモノ、中ニ就キ郵便事務ニ適當ナリト認ムル者ヲ撰出シ被撰人ノ諾否及身元引受人ノ有無ヲ取調履歷書(書式一號)ヲ添ヘテ之ヲ推薦スヘシ

但辭職出願者又ハ死亡者若クハ犯罪ニ依リ官職ヲ失ヒタル者アルトキ後任ヲ要スル場合ヲ除ク外ハ本大臣ノ指揮ヲ待テ後撰出スヘシ

第二條 逓信管理局長ハ時宜ニ依リ三等郵便局長ノ撰出ヲ郡區長ニ囑托スルコトヲ得

第三條 逓信管理局長ニ於テ三等郵便局長ノ任官辭令書ヲ傳達スルトキハ受書(書式二號)及身元引受證書(書式三號)本人非戸主ナルトキハ戸主ノ保證(書式四號)ヲ差出サシメ之ヲ本大臣ニ報告シ且採用ノ旨ヲ其地方長官及郡區長ニ

通知スヘシ其免官ノトキ亦同シ

第四條 三等郵便局長ヲシテ爲替又ハ貯金ヲ取扱ハシムルトキハ「逓信管理局長」ニ於テ別ニ定ムル規程ノ保證品ヲ徵收スヘシ
第五條 被擧人ヨリ差出シタル書類及前條ノ保證品ハ「逓信管理局」ニ保管スヘシ

(書式略ス)

○三等電信局長選任方明治二十一年六月勅令第四十五號

朕三等電信局長ノ選任及手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三等電信局長ハ三等郵便局長ノ例ニ依リテ選任シ手當ヲ支給スヘシ

○郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補任用方明治二十三年七月勅令第一百十號

朕郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便電信書記補郵便書記補並郵便爲替貯金局書記補ハ逓信大臣別ニ試験規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得其規則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

○郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補試驗規則二十三年八月十六號逓信省令第十六號
明治二十三年勅令七月第三十號ニ依リ郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補試驗規則左ノ通り之ヲ定ム

郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補試驗規則

第一條 年齡滿十七歲以上四十五歲以下ニシテ一年以上郵便電信又ハ郵便爲替貯金ノ業務ニ從事シタル者ハ書記補ノ試験ニ應スルコトヲ得
第二條 郵便電信局郵便局電信局並郵便爲替貯金局ニ於テ書記補ノ任用ヲ要スル時ハ其局長ハ第一條ニ適合スル者ニ就キ別ニ定ムル試験手續ニ依リ試験ヲ執行シタル上其成績ヲ逓信大臣ヘ申立ツヘシ

郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補任用方

遞信大臣ハ遞信省文官普通試験委員ニ下附シテ之ヲ點查セシメ合格者
中所要ノ人員ヲ採用スルモノトス

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ試験ヲ要セス直ニ書記補ニ任用
スルコトヲ得

一 本規則施行ノ前二年以上郵便電信局郵便電信局又ハ郵便爲替貯
金局ノ雇員トナリ現ニ其職ニ在ル者ニシテ遞信大臣ニ於テ事務ニ
熟練シタルト認ムル者

二 遞信省規定ノ電氣通信技術員養成規則ニ依リ電氣通信技術ノ傳習
ヲ卒業シ六箇月以上其業務ニ從事シタル者

○

○北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用方明治二十四年七月
勅令第百十三號

朕北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布
セシム

第一條 北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ現
ニ判任官六級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス文官高

等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル北海道集治
監分監長及北海道廳典獄ハ高等試験ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等官ニ轉任
スルコトヲ得ス

附則

第三條 本令ハ明治二十四八月十六日ヨリ施行ス

○

○府縣參事官及典獄特別任用令明治二十三年十月
勅令第二百二十七號

朕府縣參事官及典獄特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣參事官典獄特別任用令

第一條 府縣參事官並典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官三等以上ノ

府縣參事官及典獄特別任用令

現職ニ在ル者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル府縣參事官並典獄ハ高等試験ヲ經ルニ非サレハ各他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○

○郡區長ハ當分内務大臣ノ指定科目ニ依リ試験ス明治二十年七月閣令第二十號地方現今ノ情況ニ依リ郡區長ノ試験ハ學術ニ偏セス實務ヲ旨トシテ專ラ其地ノ狀勢民情及利害ニ通曉スル者ヲ選任スヘキ必要アルヲ以テ郡區長ノ試験科目ハ當分ノ内地方ノ實況ヲ斟酌シテ内務大臣ノ指定スル所ニ依ル但郡區長ハ高等試験ヲ經タル者ニ非レハ他ノ高等官ニ轉スルコトヲ得ス

○郡區長試験條規二十年十二月五日內務省令第五號郡區長試験ニ關シ左ノ條規ヲ定ム

- 第一條 郡區長ノ試験ハ左ノ科目ヲ以テ内務省ニ於テ之ヲ行フ
 - 一 就職スヘキ地方ノ風土慣例及物産
 - 一 郡區長職務ニ必要ナル法令
- 第二條 郡區長職務ニ關スル公文ノ立案
- 第三條 郡區長ノ試験ヲ受ケルハ滿三十年以上ノ者タルヘシ但該地方ニ於テ五箇年以上奏任官又ハ郡區長ノ職ヲ奉シタル者ハ此限ニアラス
- 第四條 試験出願者ハ願書ニ就職スヘキ地名ヲ記入シ履歷書ヲ取添ヘ北海道廳又ハ府縣廳ヲ經テ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第五條 試験委員ハ内務大臣内務省ノ高等官若クハ他官廳ノ高等官ヨリ選テ之ヲ命シ又ハ囑託シ内務省總務局長ヲ以テ委員長トス
- 第六條 試験委員ハ必要アル場合ニ於テハ問題ヲ選定シテ北海道廳長官府縣知事ニ送付シ該地方高等官三名以上ノ列席ニ於テ其應答ヲ爲サシムルコトヲ得
- 第六條 試験ノ手續ニ關スル細目ハ試験委員長ノ定ムル所ニ依ル

郡區長ハ當分内務大臣ノ指定科目ニ依リ試験ス

○郡區長特別任用方明治二十三年二月
勅令第九號

朕郡區長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 郡區長ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官「五等以上」ノ現職ニ在ル
モノニ限り當分ノ内試験ヲ要セス郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ任用ス
ルコトヲ得

第二條 郡區長試験委員長銓衡ヲ經テ郡區長ニ任用シタル者他ノ道廳府縣
ノ郡區長ニ轉任スルトキハ更ニ郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經ヘシ

第三條 郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ任用シタル郡區長ハ高等試験ヲ經
ルニアラサレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○判事檢事登用試験規則明治廿四年五月
司法省令第三號

判事檢事登用試験規則左ノ通相定ム
判事檢事登用試験規則

第一章 試験委員

第一條 判事檢事登用試験委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條 判事檢事登用試験委員長及委員ハ大審院控訴院ノ判事檢事司法省
高等官ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條 判事檢事登用試験委員長ハ委員ヲ監督シ試験ニ關スル一切ノ事務
ヲ總理ス

第四條 試験委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試験舉行毎
ニ司法大臣之ヲ命ス

第二章 受試資格

第五條 判事檢事登用試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ

左ノ各項ノ一ニ該ル者ニ限ル

一 第一及第三高等中學ニ於テ法科ヲ卒業シタル者

二 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

三 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

第六條 裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第三章 第一回試験

第七條 第一回試験ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試験ノ期日ハ試験委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條 試験志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

一 履歷書

二 身分年齢及兵役ニ關スル證明書

三 第五條ニ定メタル要件ノ證明書

第九條 試験ハ受験者ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二様トス

第十條 筆記試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ各法ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條 試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試験ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條 口述試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモニ科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半数ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第二付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十四條 志願者口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タサルモノトス
第十五條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告ス

第十六條 帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章 實地修習

第十七條 試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條 修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若ハ檢事正ハ每年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作り控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條 試補ハ修習目錄ヲ作り其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閱ヲ受クヘシ

第二十條 試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内亦同シ
第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ニ非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條 試補ハ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歷ニ記入スヘシ

第二十二條 試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不充分ニシテ第二回試験ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ
司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章 第二回試験

判事檢事登用試験規則

第二十三條 第二回試験ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ

試験ノ場所ハ司法大臣之ヲ定メ試験ノ期日ハ試験委員長之ヲ定ム

第二十四條 試補第二回試験ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目録ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條 司法大臣ハ第二回試験ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試験委員長ニ通知シ試験ヲ行ハシム

第二十六條 第二回試験ハ受験ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試験スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二様トス

第二十七條 試験委員ハ試補ニ筆記試験ノ爲メ二件以上ノ訴訟記録ヲ付與スヘシ

第二十八條 受験者ハ付與セラレタル訴訟記録ニ就キ事實及理由ヲ詳示シ

タル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ二十日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ若シ此期間内ニ答案ヲ差出サ、ルトキハ試験ハ成立タサルモノトス

第二十九條 口述試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

又訴訟記録ニ就キ問ヲ發シ之ニ答ヘシムヘシ其記録ハ試験期日ノ三日前ニ之ヲ付與ス

第三十條 左ノ場合ニ於テハ司法大臣ハ試験委員長ノ報告ニ因リ試補ヲ免ス

- 一 第二回試験ニ及第セサルトキ
- 二 第二回試験ノ成立タサルトキ

第三十一條 前條第二ノ場合ニ於テ試補已ムヲ得サル事故アリシコトヲ證明シ試験委員之ヲ正當ト認メタルトキハ其旨ヲ司法大臣ニ報告スヘシ
司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ其試補ニ一回ヲ限り次期ノ試験マ

テ引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第三十二條 第一回試験ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ
第二回試験ニモ亦之ヲ適用ス

○

○裁判所書記登用試験規則 明治二十四年五月
司法省令第四號

裁判所書記登用試験規則左ノ通相定ム

裁判所書記登用試験規則

第一章 試験

第一條 裁判所書記登用試験ハ文官試験ニ關ル勅令ノ外本則ノ規程ニ從フ
第二條 試験ハ各控訴院ニ於テ之ヲ行フ
第三條 試験委員ハ控訴院判事檢事書記長又ハ其管内地方裁判所ノ判事檢
事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

試験委員長ハ委員中官等最モ高キ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 試験ハ作文筆寫書取算術簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴
訟法ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

第五條 試験委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試験
一ヲ受ケシムルコトヲ得此場合ニ於テ試験問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏監
督シテ之ヲ作ラシム

第六條 試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノ
ト認メタルトキハ口述試験ノ爲メ受験者ヲ呼出スヘシ

第七條 受験者口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タサルモノトス

第八條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員長及試験委員ノ連署シタル及第
證書ヲ授與ス

第九條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘ
シ

第二章 實地修習

第十條 試驗ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セラル、コトヲ得
裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲
スヘシ

第十一條 實地修習ノ順序ハ控訴院長檢事長協議シテ之ヲ定ム

第十二條 實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若ハ檢事正又ハ區裁判所ノ
一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢事之ヲ爲ス

指揮監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ

第十三條 裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於
テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ指揮監督者之ヲ諭告スヘシ

第十四條 裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當
ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムルトキハ指揮監督者ハ控訴院
長檢事長ニ之ヲ報告スヘシ

第十五條

指揮監督者ハ裁判所書記見習其指揮監督ニ係ル修習ヲ終リタル
トキハ修習ニ關ル證明書ヲ作り修習ノ成績並職務上及職務外ノ行狀ヲ記
載シテ之ヲ控訴院長檢事長ニ差出スヘシ

若シ行狀ニ就キ諭告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ附記スヘシ

第十六條

本章ノ規程ハ試験ヲ經スシテ裁判所書記見習トナリタル者ノ實
地修習ニモ亦之ヲ適用ス

○執達吏登用規則二十三年八月
司法省令第二號

明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ依
リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則

第一條

執達吏ニ任セラル、ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一

年齢滿二十五歳以上ナルコト

第二

陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

執達吏登用規則

- 第三 身體健全ナルコト
- 第四 家計ノ整理シタルコト
- 第五 品行方正ナルコト
- 第六 試験ニ及第シタルコト
- 第二條 左ニ掲クル者ハ執達吏ニ任セラル、コトヲ得ス
- 第一 重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ非ス
- 第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者
- 第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者
- 第四 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者
- 第三條 執達吏ノ試験ヲ受ケントスル者ハ少クトモ六箇月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルコトヲ要ス
- 職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ秘密ヲ漏洩スヘカラス
- 第四條 職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及履歷書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ
- 第五條 職務修習ノ詳可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ
- 區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁

- 判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ
- 第六條 控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得
- 第七條 職務修習者試験ヲ受ケントスルニハ第一條第一乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ
- 區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ
- 控訴院長ハ書類ヲ調査シ試験ノ許否ヲ定ムヘシ
- 第八條 試験ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ
- 第九條 試験委員長及試験委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス
- 第十條 控訴院長ハ試験ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試験委員長ニ送付スヘシ
- 前項ノ送付アリタルトキハ試験委員長ハ試験期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ
- 第十一條 試験ハ筆記口述ノ二様トス
- 口述試験ハ筆記試験ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ
- 第十二條 試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

- 第一 民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程
- 第二 執達吏ニ關ル諸規則
- 第三 算術(加減乘除分數比例)
- 第四 讀書筆寫
- 第十三條 筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム
試驗委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試驗問題
ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得
- 第十四條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成
績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス
- 第十五條 試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタ
ル及第證書ヲ授與ス
- 第十六條 試驗ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非サレ
ハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス
- 第十七條 不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試驗ヲ受クルコ
トヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス
- 第十八條 試驗委員ハ試驗ノ問題及成績ヲ記錄ニ記載スヘシ
- 第十九條 試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗成績ヲ控訴院長ニ報告
スヘシ

- 第二十條 左ニ掲ケタル者ハ試驗ヲ要セス執達吏ニ任セラル、コトヲ得
 - 第一 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校司法舊法
學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ
認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ
有スル者
 - 第二 裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者
 - 第三 判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者
 - 第四 陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者
- 第二十一條 第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニモ亦之ヲ
適用ス
- 前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所
ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書
ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ
- 區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス執達吏ニ任セラル、コトヲ得(二十年
司法省令第六號
ヲ以テ本項追加)
- 第二十二條 試驗及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リ
タル者並ニ區裁判所書記ヨリ轉任スル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ
待テ控訴院長之ヲ攝行ス(二十四年司法省令
第六號ヲ以テ改正)
- 第二十三條 執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證

金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間内ニ保證金ヲ差出サ、ル
トキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム
保證金ハ相當ノ價格アル公債證書若ハ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代ユ
ルコトヲ得

第二十四條 執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ交付ス
執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

附則

第二十五條 本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試験及任補ヲ行フコト
ヲ得

○警視特別任用令 明治二十四年四月
勅令第三十七號

朕警察署長ニ補スヘキ警視特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 警察署長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警部ニ奉職シ判任官三等以

上ノ現職ニ在ル者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス高等試験委員ノ銓衡ヲ經
テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル警視ハ高等試験ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等
官ニ轉任スルコトヲ得ス

○巡查現職ノ者警部同補ニ任用方 明治二十三年二月
勅令第十號

朕巡查奉職滿五年以上ノ者ヲ警部警部補ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公
布セシム

巡查奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試験
試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試験委員長ノ銓衡ヲ經テ警
部警部補ニ任用スルコトヲ得

巡查現職ノ者警部同補ニ任用方

但試験ヲ經スシテ任用シタル警部警部補ハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ
他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○看守現職者看守長同副長ニ任用方明治二十三年七月
勅令第四百四十六號
朕看守奉職滿五年以上ノ者ヲ看守長看守副長ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之
ヲ公布セシム

看守奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試験
試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試験委員長ノ銓衡ヲ經テ看
守長看守副長ニ任用スルコトヲ得
但試験ヲ經スシテ任用シタル看守長看守副長ハ普通試験ヲ經ルニアラサ
レハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

第二十四年勅令
第九十九號
陸軍將校分限令
海軍將校分限令
陸軍將校分限令
海軍將校分限令
陸軍將校分限令
海軍將校分限令

○陸軍將校分限令明治二十一年十二月
勅令第九十一號

朕陸「海」軍將校分限令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸「海」軍將校分限令

- 第一條 將校ハ終身其官ヲ保有シ其制服ヲ著シ其官ニ對スル禮遇ヲ享ク之
ヲ將校ノ分限トス
- 第二條 將校ハ左ニ掲クル事項ノ一ニ因ルニ非レハ其分限ヲ失フコトナシ
- 第一 本人ノ請願ヲ許容シ其官ヲ免セラレタルトキ
- 第二 日本人タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
- 第三 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 第四 剝官ノ宣告ヲ受ケタルトキ
- 第五 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ヒタルトキ
- 第六 武官タルノ本分ニ背キ勅裁ニ依リ免官トナリタルトキ

陸軍將校分限令

第三條 將校ノ位置ヲ分ツコト左ノ如シ

第一 現役

第二 豫備

第三 後備

第四 退役

第四條 現役トハ現ニ軍務ヲ奉スル者修學ヲ命セラレタル者及陸「海」軍將校各其部内ノ文官ニ任セラレタル者ヲ云フ休職及停職ニ在ル者ハ現役ニ準ス

休職トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ因リ職務ナキ者ヲ云フ

一 解隊

二 廢職

三 定員改正

四 満期解任

- 五 俘虜トナリタル者歸朝シ他員已ニ代リテ其職ニ在ルトキ
 - 六 特別ノ職務ヲ終ヘ又ハ修學満期ニシテ就職ノ命ナキトキ
 - 七 傷痕若クハ疾病六箇月ニ至リ尙快復ノ候ナキトキ但本人ノ請願或ハ職務ニ因リ代員ヲ必要トスルトキハ六箇月ヲ待ツノ限ニアラス
 - 八 本人ノ請願ニ依リ修學ヲ許容シタルトキ
 - 九 陸「海」軍上長官士官各其部内ノ文官ニ專任シタルトキ
- 停職トハ其行爲懲戒スヘキコトアリ其情狀稍輕ク在職又ハ就職ヲ停メラル、者ヲ云フ但停職者ハ一箇年ノ後ニ非レハ就職スルコトヲ得ス
- 第五條 豫備トハ年齢満限ニ至ラスシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ因リ現役ヲ退キタル者及一年志願兵ヨリ士官ニ任シタル者ヲ云フ
- 第一 恩給令ニ依リ旨ヲ諭サレ現役ヲ退キタルトキ
 - 第二 休職ニ入り五年ニ至リ就職セサルトキ
- 但第四條第二項ノ第八第九ニ該ル者ハ此限ニアラス

第三 停職ニ入り二年ニ至リ就職セサルトキ

第四 陸海軍各部外ノ文官ニ專任シタルトキ

第五 貴族院令第四條ニ依リ貴族院議員ト爲リタルトキ(二十二年勅令
號百二十五號)

貴族院令ハ第
一類ニ限ス

ヲ以テ本
項追加

第六條 後備トハ年齢滿限ニ至リ現役ヲ退キタル者及豫備滿期ニ至リタル者ヲ云フ

豫備後備ノ服役年期ハ別ニ之ヲ定ム

第七條 退役トハ後備滿期ニ至リタル者又ハ傷痍疾病ノ爲メ永久服役ニ堪

ヘスシテ現役又ハ豫備又ハ後備ヲ退キタル者ヲ云フ

第八條 豫備後備者ハ召集ニ應スヘキモノトス

第九條 本令ハ將校相當官ニ適用ス

附 則

第十條 陸軍將校免黜條例將官退職令及海軍將校准將校免黜條例ハ廢止ス

第十一條 陸軍將校免黜條例「及海軍將校准將校免黜條例」ニ依リ待命若ク

ハ非職タリシ者ノ位置ハ左ノ通之ヲ定ムヘシ

一 待命ノ者ハ休職トス但陸軍將官ニシテ現ニ陸軍部外ノ文官ニ專任
ノ者ハ豫備トス

二 非職ノ者ハ休職トシ其停職解職ニ因テ非職タリシ者ハ停職トシ其
年數ハ各非職タリシ當日ヨリ起算ス但定期ノ年數ヲ越エタル者ハ
豫備トス

三 「海軍將校ニシテ現ニ海軍部外ノ文官ニ專任ノ者ハ豫備トス」

第十二條 「海軍將校ニシテ年齢滿限ニ依リテ退職罷役ノ者ハ後備トス」

○ 海軍將校分限令明治二十四年七月
勅令第七十九號

海軍將校分限令

朕陸海軍將校令分限中海軍將校分限令ニ關スル件ヲ廢シ海軍將校分限令制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍將校分限令

第一條 海軍將校トハ大將中將少將大佐少佐大尉少尉ヲ云フ

第二條 將校ハ終身其官ヲ保有シ其制服ヲ著シ其官ニ對スル禮遇ヲ享ク之ヲ將校ノ分限トス

第三條 將校ハ左ニ掲クル事項ノ一ニ依ルニ非レハ其分限ヲ失フコトナシ

第一 本人ノ請願ヲ許容シ其官ヲ免セラレタルトキ

第二 日本人タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

第三 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

第四 剝官ノ宣告ヲ受ケタルトキ

第五 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ヒタルトキ

第六 武官タルノ本分ニ背キ勅裁ニ依リ免官トナリタルトキ

第四條 將校ノ位置ヲ分チコト左ノ如シ

第一 現役

第二 豫備

第三 後備

第四 退役

第五條 現役トハ現ニ軍務ヲ奉スル者修學ヲ命セラレタル者將官海軍部内ノ文官ニ任セラレタル者及待命者ヲ云フ休職停職ニ在ル者ハ現役ニ準スレバ待命トハ現職ナクシテ命ヲ待ツ者ヲ云フ

休職トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ依リ職務ナキ者ヲ云フ

一 待命一箇年ヲ過タル者

二 傷痍若クハ疾病六箇月ニ至リ尙ホ快復ノ候ナキ者

三 本人ノ請願ニ依リ修學ヲ許容シタル者

四 前項ノ修學者ニシテ修學滿期ノ後就職ノ命ナキ者

- 五 上長官士官海軍部内ノ文官ニ專任シタルトキ
停職トハ其行爲懲戒スヘキコトアリ其情狀稍輕ク在職又ハ就職ヲ停メラ
ル、者ヲ云フ但停職者ハ一箇年ノ後ニ非レハ就職スルコトヲ得ス
- 第六條 豫備トハ年齢滿限ニ至ラスシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ依リ現役ヲ
退キタル者ヲ云フ
- 第一 明治二十三年^六月勅令第九十九號第三條ニ依リ現役ヲ退キタルト
キ
- 第二 休職ニ入り二箇年ニ至リ就職セサルトキ但第五條第三項ニ第三
ニ該ル者ハ此限ニアラス
- 第三 停職ニ入り一箇年半ニ至リ就職セサルトキ
- 第四 海軍部外ノ文官ニ專任シタルトキ
- 第五 貴族院令第四條第五條ニ依リ貴族院議員ト爲リタルトキ
- 第七條 後備トハ年齢滿限ニ至リ現役ヲ退キタル者及豫備滿期ニ至リタル

者ヲ云フ

豫備後備ノ服役年期ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 退役トハ後備滿期ニ至リタル者又ハ傷痕疾病ノ爲メ永久服役ニ堪
ヘスシテ現役又ハ豫備又ハ後備ヲ退キタル者ヲ云フ

第九條 豫備後備者ハ召集ニ應スヘキモノトス

第十條 本令ハ將校相當官ニ適用ス

附則

第十一條 本令公布以前休職ニ入り二箇年ヲ過キタルモノハ本令公布ノ日
ヨリ豫備トシ其他ハ休職ニ入りタル日ヨリ起算シ二箇年ニ至リ豫備ニ入
ルモノトス



○官吏非職條例 明治十七年一月

第三號達

官吏非職條例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏非職條例

第一條 官吏判任官以上并ニ出仕御用掛モ之ニ準ス 奉職中各官廳ノ事務張弛其他疾病等ノ事

故ニ因リ本屬長官ハ其僚屬ノ官吏ニ非職ヲ命スルコトヲ得但勅任官ノ非

職ハ上裁ニ依リ奏任官ハ「太政大臣」ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス(十七年第三十

奉職中ノ下廢應云々ノ六字ヲ刪ル)

第二條 非職員ハ其本官ヲ奉シテ常ニ其職務ニ從事セス其他總テ在職官吏

ニ異ナルコトナシ

第三條 本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ非職員ヲシテ更ニ其職務

ニ從事セシムル事ヲ得

非職員復職スルトキ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ「太政大臣」ノ認可ヲ經

テ之ヲ命ス

第四條 非職ハ三年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第五條 (二十四年勅令第二十三號ヲ以テ本條ヲ削除ス但シ明治二十四年四

月一日現在ノ非職員ニハ其非職年限内仍ホ現俸四分ノ一ヲ支給ス)

第六條 廢應廢官ノ際御用滞在ヲ命スル者アルトキハ本條例ニ準據ス(十七

年第三十九號ヲ以テ追加)

第七條 非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ地方病院學校及農工商陸海運

輸等會社ノ業務ニ從事シ其役員ト爲リ又ハ商業ヲ營ムコトヲ得但此場合

ニ於テハ第五條ノ俸給ヲ支給セス(十二年勅令第三百一號ヲ以テ改正シ二

正ス)

本屬長官ハ其非職員ノ勅任官ニ係ルモノハ上裁ニ依リ奏任官ニ係ルモノ

ハ「太政大臣」ノ認可ヲ經テ之ヲ許可ス(十七年第七十七號

達ヲ以テ本條追加)

第八條 (十七年第七十七號達ヲ以テ追加シ二十

三年勅令第三百三十九號ヲ以テ削除ス)

○非職官吏俸給下渡轉居及商業許可 明治十九年二月

官吏非職條例

非職官吏ノ俸給下渡、住居移轉及商業ニ關シ左ノ通之ヲ定ム

第一條 「凡ソ非職官吏ノ俸給ハ大藏省ニ於テ下渡スヘシ」

第二條 本屬長官ハ非職官吏ノ官等俸給氏名住所及非職ノ年月日等ヲ大藏大臣ニ通知スヘシ

第三條 非職官吏ハ本屬長官ニ届出テ本屬官廳所在ノ地ノ外ニ住居スルコトヲ得

第四條 本屬長官前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏大臣ニ通知シ大藏大臣之ヲ地方官ニ通知シ該廳ヲ經由シテ俸給ノ下渡ヲ爲スヘシ

第五條 非職官吏移轉地ニ到著シタルトキハ其住所ヲ本屬長官及地方官ニ届出ヘシ嗣後更ニ其住所ヲ移轉スルトキモ亦同シ

第六條 非職官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得テ商業營ムコトヲ得

○非職官吏ノ俸給ハ所屬廳ヨリ下付ス二十二年三月八號

非職官吏ノ俸給ハ明治二十二年度以降其所屬廳ニ於テ下渡ス可シ但明治二十二年三月三十一日マテニ非職ヲ命セラレタル官吏ノ俸給ハ従前ノ通大藏省ニ於テ下渡ス可シ
○非職官吏年限滿期届出二十年一月四號
非職官吏ハ年限滿期ノ日ニ於テ本官自ラ消滅スヘキ筈ニ付其滿期本官消滅ノ者ハ十九年閣令第一號第二條ニ照準シ其旨當省ニ届出ヘシ

○非職官吏府縣郡市町村及公共組合ノ有給吏員トナル者ハ非職俸ヲ給セス明治二十三年八月七號 勅令第六十一號
朕非職官吏俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
非職官吏ニシテ府縣郡市町村及公共ノ組合ノ吏員トナリ其給料ヲ受クル者ハ官吏非職條例第五條ノ俸給ヲ支給セス

○技術官休職令 明治二十三年十二月
勅令第二百八十六號

朕技術官ノ休職ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 技術官ノ休職ハ一年ヲ一期トシ期滿レハ其官ヲ免ス

第二條 技術官ノ休職ニ關シ特別ノ規定ナキモノハ總テ官吏非職ノ例

ニ依ル

第三條 本令ハ明治二十四年二月一日ヨリ施行ス現ニ休職中ノ者ノ休

職期限モ亦同日ヨリ起算ス

法規提要下卷終

21/4/35

明治廿四年十二月廿日出版

内閣法制局

印刷兼
發賣人

八尾新助

東京市神田區錦町
三丁目八番地

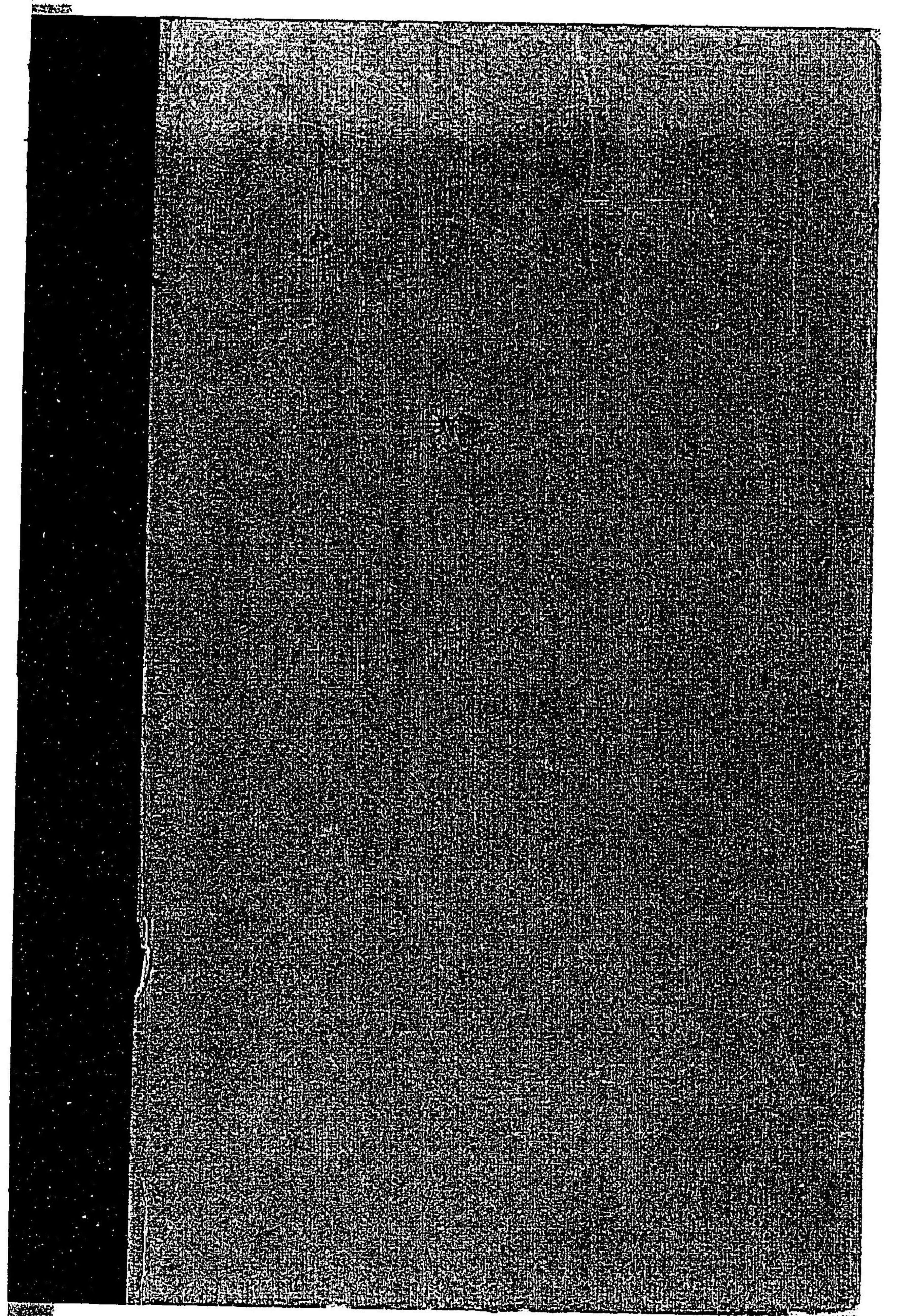
73990

1/2

~~34~~ 3/17/21
~~2/09~~ H/1
(2) ~~2/09~~

14.7

13



14.7

13

25.10.24